

山村社会の農耕儀礼 (local wisdom) の研究「北スマトラと東北地方の比較研究」

北スマトラ大学
文学部教授

Hamzon Situmorang (+1)

インドネシアの北スマトラと日本の東北地方における山村社会の農耕儀礼を比較した結果、以下のことが明らかになった。

日本の山村農耕は季節と年中儀礼との結びつきが強い。今回調査を実施した蔵王連峰の南に位置する山村である宮城県七ヶ宿町では、兼業農家が多く住民の多くは地元の企業や公務員として定年を迎えた老人である。専業農家は兼業農家より少ない。殆どの農家は、田畑の相続人であるが、農耕の目的は収入より農産物栽培の楽しみである。一方、北スマトラの山村は温暖な地域にあることから季節とは関係なしに、いつでも田植えができる。従い、隣り合う田んぼで違う日に田植えをするようすを見ることが出来る。殆どの農家は専業農家であり、他の仕事がないためにすべての生活費は田んぼからの収入で賄われている。兼業農家も、多少は存在するが彼らの本業は地元の公務員や地元の商店主に限られる。

日本の山村では農家が、春を待って同じ時期に田植えをする。また、共同作業もあり、農家は地域毎に同じ農業組合等に所属していることから農家同士の結びつきも強い。一方、北スマトラの山村農家は田畑を耕すのは Aroan という耕作専門のグループで、変わり交代に田んぼを耕す。日本の山村は水が豊かな場所が多く、田畑への水の供給にはパイプを使っているため、水もれが少なく必要な時期に十分な水を提供できる。北スマトラの山村では水分けには地面に掘ったみぞをつかうので、水もれが多い。そのために農耕に不可欠な水をめぐって農家同士の争いも起きている。

日本の山村では農耕は神々と人間の間に関係があると信じられてきた。春の初めに神々は山から農耕を助けるために山村に下ると信じられている。雪解け後の春に山村に現れる蛇、狐などは神の使いとしてみなされて信仰の対象となっている。それゆえ、日本の農民はこれらの生き物を大事にする傾向がある。一方、北スマトラの山村農家は近代になって古い神話や伝説を信じなくなった。最近では農作物に被害を及ぼす田んぼに集まる全ての生き物を殺すべきもという考え方がある。そのために全ての生き物は食べ物である、という考え方もある。また、田畑の農作物への被害をなくすために農薬や毒を使用することも多くなった。

近代に入ってインドネシア、日本の山村は双方共に自然に対する考え方が変わってきている。しかし、それぞれの地域がおかれた気候、歴史及び、経済的な環境の違いから日本の山村はインドネシアの山村と比較して動植物を含めた自然へより敬意を払っているように見える。また、その結果として安全で豊かな農産物に恵まれているようにも見える。今回の調査、研究からインドネシアの山村の農民も、もう一度自然と共存してきた昔の考え方を見直すべきではないかと思われる。

研究成果の公表について

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名 : “Half a Century of Japanese Studies in Indonesia: Reflecting the Past, Envisioning the Future
発表者名 : Hamzon Situmorang
会議名 ; インドネシア日本研究学会 (ASJI)
日時 : 2016年10月27~28日
場所 : インドネシア大学 Jakarta.

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名 : Comparative Study On Rituals IN Highland Farming Areas In North Sumatera And In Tohoku Area, Japan.
発表者名 : Hamzon Situmorang

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

題名 : 日本民俗学
著者名 : Hamzon Situmorang
出版社 : USU Press
発行時期 : 2017